

長期透析患者の新型コロナ感染後の療養環境の調整

医療法人衆和会 長崎腎病院

○高橋聖子 高橋沙織 丸田麻莉絵 船越 哲

【背景】

新型コロナ感染症は、ワクチン接種の普及とオミクロン株への置き換えにより、透析患者であっても多くは軽症であり、外来透析を継続する流れとなっている。しかし、患者の背景から通院が困難で、隔離入院がやむない症例もある。今回、重度のアミロイドーシスを有する長期透析患者が新型コロナ陽性となったが、自力での通院不能で、かつ妻の日常介護が必要で夫婦での入院となった症例を経験した。

【症例】

71歳、男性、透析歴40年、要介護5。認知機能低下はないが不安神経症で妻と二人暮らし。透析アミロイド症で関節の可動域は極めて小さく、過去の入院でも終日妻の付き添いが必要であった。コロナ陽性後に通院介護事業所の介入が不能となり、入院加療となった。

【対応】

患者は妻の付き添いなしの入院では精神的に耐えられないと訴え、妻はコロナ陰性であり、個室の密閉された環境で一緒に過ごすことで陽性となる可能性が高ことを了解の上、付き添い入院(個室に妻用のベッドを入れる)を希望された。妻は退院までコロナ陽性とならなかった。

【考察】

新型コロナ感染と通院介護不能のため入院となったが、妻の付き添い入院により患者の不安軽減に繋がった。ただ、日常生活介助の目的で、非感染者が感染者と同室で過ごすことに関しては、今後も慎重な倫理的検討が必要と考える。